



プラントは 色彩に包まれて

グリダム発電所の巨大なタービンホールを埋めつくす壮観な芸術作品は、建築家と芸術家による創造的なコラボレーションの証だ。文 ダブラスカ・ファルコン

シモン・ポリバル水力発電所の導水路調査に着手したベネズエラの土木技師、ハーマン・ルーとアルヘニス・ガンボアは、これこそ千載一遇のチャンスだと直感した。ベネズエラ南部ポリバル州、世界一の落差を誇るエンジェルフォールに程近いその場所で、彼らは理想郷の夢を実現しようとしていた。

23年の歳月を費やして完成をみた。動員された労働者は延べ1万6000人以上に及ぶ。4250平方キロの広大な人工湖が造られ、岩盤を何千メートルもくり抜いて建設されたふたつのタービンホールには、20基の発電機が設置されている。グリダムは現在、中国の三峡ダム、ブラジルとパラグアイの国境にあるイタイプダムに次いで、世界第3位の発電出力を誇る。

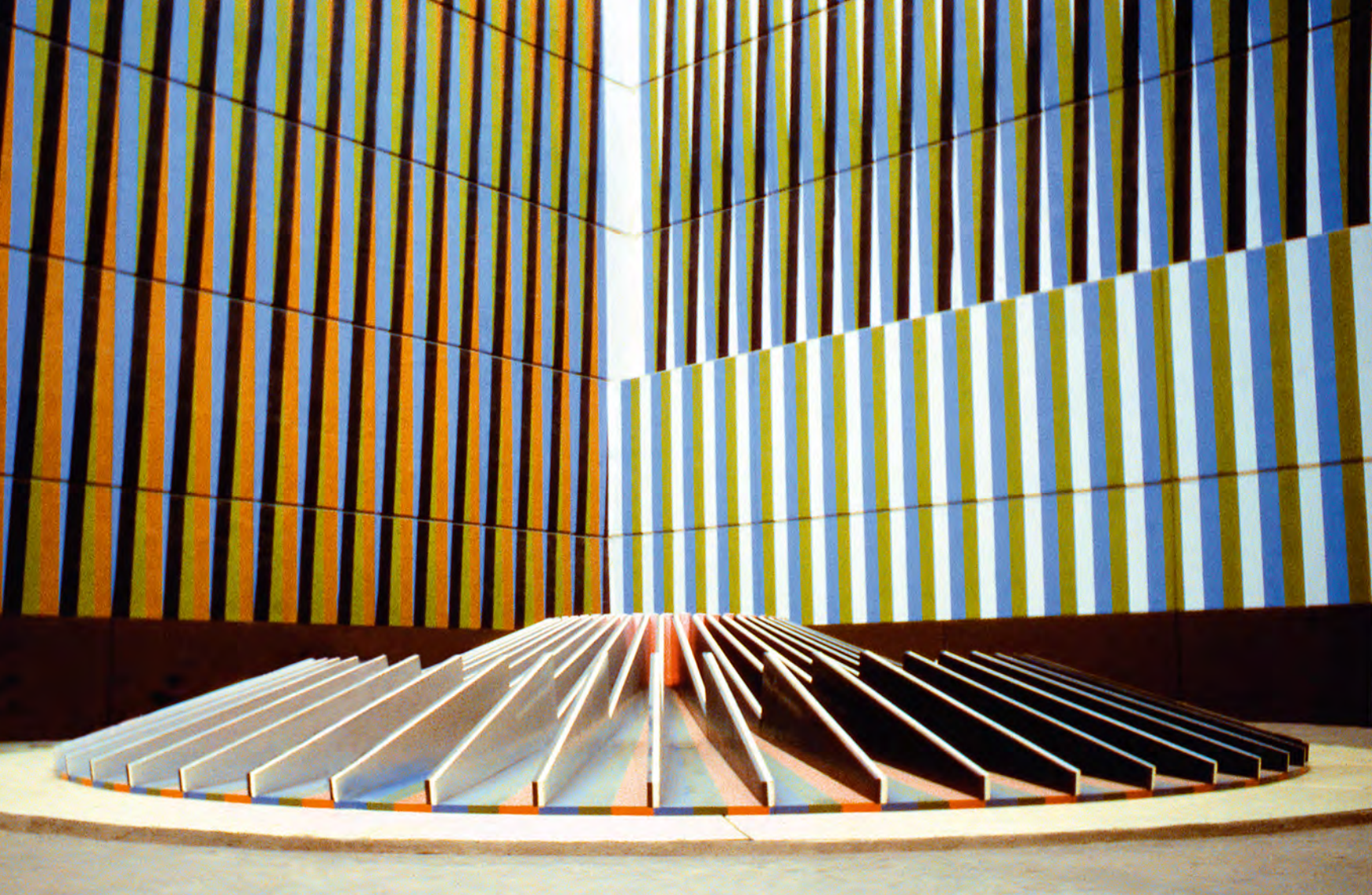
土木工学の輝かしい成果を、万人に分かるように表現したいと、建築家たちは考えた。工学技術の粋を集めた記念碑的規模の建造物にふさわしい称賛のしるしとして、芸術的要素を取り入れたい。彼らは、建設現場に芸術家を参加させることが実際に可能か、検討した。「300年後の人々に、この建築は先見の明ある感性豊かな世代の先人によって成し遂げられたものである」と評されるに違いない」と、彼らは胸を張る。建築家たちの先見性は、グリダムの本質を、産業的機能性という枠を超えて変容させた。芸術と工学の歴史に残る画期的な作品として、不動の地位を獲得したのだ。

グリダムの建設に参加した建築家や技師たちは、これから取り組む仕事は、過去のどんな事例もちっぽけに見えるほど巨大なプロジェクトであることを知っていた。電気供給設備事業を行うカロニ河電力公社（EDENSA）の委託を受けて、彼らは、ベネズエラの総消費電力の4分の3に相当する供給能力を持つ、鋼鉄とコンクリートの巨大な施設的设计にあたった。プロジェクトは1963年から1986年まで、実に

「画家で彫刻家のアレハンドロ・オテロと、キネティックアートで知られるカルロス・クルズ・デイエスだ。「タービンの轟音が地盤や壁に反響する巨大な空間に対峙したとき、自分の存在がいかにちっぽけなものか、実感させられた」と、クルズ・デイエスは回想する。「あれだけのスケールに挑むことになったら、誰だって怖気づくさ。今は亡きオテロは、発電所の近くのオー

問題は、誰に依頼すべきか、だった。建築家たちは、ふたりの国際的に有名なベネズエラ人アーティストに白羽の矢を立てた。

問題は、誰に依頼すべきか、だった。建築家たちは、ふたりの国際的に有名なベネズエラ人アーティストに白羽の矢を立てた。



【左ページ】
各タービンホールの中核部に
設置されている10基の巨大な
「クロモストラクチャー」。
(上) グラスファイバー製で、
発電タービンの上に設置された。
(下) グリダムの第2ホール
「クロモサチュレーション」。
150メートルの壁に

埋め込まれた着色電球は、
鑑賞者が自由に操作できる。
【前見開きページ】
クルズ・ディエズの
「アンビエンタシオン・
クロマティカ」(色彩環境)。
発電所にふたつあるタービン
ホールのうち第1タービン
ホールのもの。1977年制作。

うやくたどり着いたのが、壁面により多くの光を集め、
ホールの上部にタービンのある場所を示す構造物を設
けることによって、広大な
空間の圧迫感を和らげる
というアイデアだった」と
振り返る。

彼は、時間をかけて、色
彩現象に関する研究を重
ね、自ら「フィジクロミー」
と呼ぶ、独自の表現形式を
試した。フィジクロミーは、
鑑賞者の動きや光源と相互
作用する一連の色彩の帯に
よって構成され、新たな色

域をつくり出す。クルズ・ディエズにとって色彩は、時
間と空間のなかで表情を変えていくものであり、また
見る角度によって変化し展開していくものなのだ。
1977年、彼は第1タービンホールの作業に着手
した。7300平方メートルの壁面は、彼が「加法的色
彩」と呼ぶ作品で埋めつくされた。ここで彼は、7
色のカラーパネルを用いている。互いに異なる色のパ
ネルが接する部分に、より暗い仮想のラインが現れ
る。鑑賞者の目には、実際に使われている色とは異
なる色みが知覚される。ホールの中央には、フィジ
クロミーと同じ原理で不思議な色彩効果を生み出す
直径14メートル、高さ2メートルの「クロモストラク
チャー」が10基、設置された。こちらはグラスファイ
バー製で、円筒形の金属の支柱と共に、発電タービン
の上部に設けられている。クルズ・ディエズによれば、
「タービンを保守点検する時には、取り外せるように
設計されている」のだという。

第2ホールは、さらに巨大だ。クルズ・ディエズは壁
一面に、175メートルのフィジクロミーを制作した。
その色彩は、鑑賞者の見る位置によって変容してい
く。そして、このホールにも、タービンの位置を示す
クロモストラクチャーが10基、設置されている。

建築技師と土木技師と芸術家による大規模なコラ
ボレーションの証として、グリダムを一般公開するこ
とに、異論を唱える者はいなかった。落成直後から、
巨大なエンジェルフォールに加え、機関室とアトワー
クを見学するツアーが実施された。クルズ・ディエズ
は、タービンホールを巨大なギャラリとしてとらえ、
そのひとつに、「クロモサチュレーション」というイン
スタレーションを置いた。これは、1000個を超す
赤と緑と青の電球が輝く色彩の壁で、色彩が、最も純
粋な、光という形のない姿で表現されている。中2階
に設置された制御卓には3つのボタンがあつて、来館
者はクロモサチュレーションを自由に操作し、広い壁
面に思い思いの色をつくり出すことができる。

タービンホールの「色彩環境」は1年がかりで完成

した。「絵画でも彫刻でもない
大仕事だった」と、クルズ・ディ
エズは振り返る。「自分のアト
リエにこもって絵を描くのと
は、わけが違う」と彼は言う。芸
家にとっては、規模そのものが
最大の問題なのだ。創造力に加
えて、計画を立て、スケジュー
ルを決め、予算を組み、さまざ
まな分野の専門家たちをまと
めなければならないし、事務処
理も必要になる。色彩の帯の寸
法を正確に割り出すための計
算は、クルズ・ディエズの助手に
任せられた。

完成した作品がどのように見えるか、アーティスト
である彼は、頭のなかにはっきりと描くことができ
る。その彼をしても、このグリダムで作品が見事に結
束したのは驚きだったという。それは、現代芸術史上、
世界でも類を見ない、前代未聞のスケールを持つ作品
であり、カルロス・クルズ・ディエズの運動性の原理を
あますところなく表現している。

シモン・ポリバル水力発電所の開業から約27年が
経った。現在では、オリジナルの20基の発電機のうち、
5基が稼働していない。逆境にありながら、このプロ
ジェクトは、2004年にカラカスで開催された「カル
ロス・クルズ・ディエズのグリアート」展で大きな注目
を浴びた。印刷とデザイン博物館で開かれたこの展
覧会でキュレーターを務めたヌサナ・ベンコはこう評
している。「クルズ・ディエズの作品に共通する特質と
して広く称賛され認知されている動的な仮想を見失
うことなく、芸術と建築と工学が融和した建築物が
成立している。世界でも稀有な作品であり、ベネズエ
ラの誇りである」。

「パテックフィリップマガジン・エクストラ」(patek.com/owners)
にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧いただけます。

「完成した作品がどのように見えるか、アーティスト
である彼は、頭のなかにはっきりと描くことができ
る。その彼をしても、このグリダムで作品が見事に結
束したのは驚きだったという。それは、現代芸術史上、
世界でも類を見ない、前代未聞のスケールを持つ作品
であり、カルロス・クルズ・ディエズの運動性の原理を
あますところなく表現している。」

シモン・ポリバル水力発電所の開業から約27年が
経った。現在では、オリジナルの20基の発電機のうち、
5基が稼働していない。逆境にありながら、このプロ
ジェクトは、2004年にカラカスで開催された「カル
ロス・クルズ・ディエズのグリアート」展で大きな注目
を浴びた。印刷とデザイン博物館で開かれたこの展
覧会でキュレーターを務めたヌサナ・ベンコはこう評
している。「クルズ・ディエズの作品に共通する特質と
して広く称賛され認知されている動的な仮想を見失
うことなく、芸術と建築と工学が融和した建築物が
成立している。世界でも稀有な作品であり、ベネズエ
ラの誇りである」。

クルズ・ディエズは振り返る。
「絵画でも彫刻でもない大仕事だった。
自分のアトリエにこもって
絵を描くのと、わけが違う」



PHOTOGRAPHS: © CARLOS CRUZ-DIEZ/ADAF, PARIS 2013